
喪失体験を繰り返す双極性障害患者のグリーフケアを経験して

医療法人衆和会 長崎腎クリニック

○吉川佳美 河野 舞 高木志緒理 植木秀一 下田美智子 橋口純一郎 船越 哲

【背景】

透析患者は喪失を体験しグリーフの症状を有する症例が多くみられるが、当院のような外来通院透析のみの施設では、実際にグリーフケアを実施することは少ない状況である。今回 COVID-19 流行期中、ライトワークや妻を亡くした双極性患者のグリーフケアを経験したため、看護師の役割について報告する。

【症例提示】

72 歳 男性 透析歴 6 年 7 ヶ月 双極性障害にて定期的に精神科受診中である。ライトワークである観光ガイドを継続し、白血病である妻の介護を行いながら透析治療を継続していたが、COVID-19 流行期にともない、ライトワークが中断となったことや、妻が死去したことによる精神的苦痛にて辞職した。元々社交的であったが、妻との死別後、食欲不振、記憶・集中力の低下などグリーフの症状を認めた。そこでグリーフケアの勉強会を行い（学びなおし）、プライマリーナースを中心にグリーフケアを実施した。具体的には感情を表出しやすい環境を提供し、表出された感情についてはスタッフ間で情報を共有し、患者との会話にフィードバックした。その後患者は抑うつ状態から回復傾向となり、ライトワークを再開している。

【まとめ】

外来専門の透析施設において、グリーフケアの学びなおしを行い、グリーフの症状を有する患者の社会復帰につなげることができた。